

規模を持つことから、この古墳に最初に埋葬された人物は、この時期に旧仲津郡に相当する地域を統括していた首長であると同時に、豊前国を代表する首長でもあったと考えられる。更に、墳丘の平面形態および石室構築の特徴からみて、この人物は当地域の出自の者であつたとしても、畿内政権の強い規制を受けていたものと推測される。

四 北垣古墳群

北垣古墳群は豊津町の南端で、祓川の西側の丘陵上に分布する（第27図参照）。この丘陵は内垣石と呼ばれるミカゲ石を産出し、南側の犀川町との境界をなす。本遺跡はこの丘陵本体から東部に枝分かれした小丘陵上に立地し、東側は祓川の沖積平野となつてゐる。遺跡地は標高の高い南部で約九四メートル、低い北部で約七三メートルとなつてゐる。沖積平野とは一〇から三〇メートル程度の標高差がある。

豊津町南部の節丸地区は、古墳時代には祓川を挟んで東西両側の丘陵部に数多くの小古墳が築造される。西側の丘陵部だけみても、南北長さ約一・一キロメートルの範囲に五〇基以上の小古墳が分布すると予想され、京築地域でも有数の古墳時代の奥津城となつてゐた。これらの小古墳は幾つかの小丘陵を単位として数基から十数基で群をなす傾向がある。また築造された時期も五世紀後半から七世紀前半にほぼ限定される。当古墳群の所在地は大字節丸字北垣である。

調査方法と遺跡の概要 当古墳群はそれまでの現地踏査により、少なくとも二基の円墳と一基の前方後円墳の存在が確認されていた。その後、樹木の伐採が終了した本調査前に再度分布調査を行つた結果、地

表面の観察などから円墳八基が存在すると予想された。

調査は、丘陵斜面が非常に急峻じゅんであったことから、尾根すじの平坦面を対象として実施した。調査対象地は、南部に踏み分け道が一本通っているだけで、ほとんど後世の地形の改変を受けていなかつた。また、個々の古墳については石室の天井部を破壊されているものもあつたが、盗掘を受けていなない古墳もあつた。

調査の結果検出した遺構は、弥生時代後期の石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・祭祀遺構などからなる墓地と、古墳時代後期を中心とした五世紀後半から七世紀前半にかけての円墳九基・小石室四基、ならびに石材を採取した跡二か所と採取した石材を集積した跡一か所などである（第三章第35図参照）。

遺構の詳細 墳形が確認された古墳はすべて円墳で、石室は竪穴式横口式石室・複室横穴式石室および明確な墳丘を持たない小石室などである。各古墳の概略については、第1表にまとめているので、ここでは盗掘を受けていなかつた2号墳について詳細に述べることとする。

2号墳（第22図）は、当古墳群のやや北部に位置する円墳で、標高は七八・五メートルである。墳丘は北西側と南東側が急斜面のため流出するが、南西側と北東側の一部で周溝が確認された。周溝は広いところで幅二・四メートルで、全体としては、直径一五・六メートル、高さ三・一メートルを計る。石室の墓壙は長さ約七・五メートル、幅四・八メートル、深さ一・五メートルで、平面形が長方形をなす。

石室（第21図）は南東側斜面に開口し、構造は当古墳群では最も新しい様相を示す複室の横穴式石室である。玄室は長さ二・四四メートル、幅一・九五メートルと主軸方向にやや長い平面形をなし、床面には二〇～三〇センチ程度の扁平な河原石の上に、五センチメートル前後の円礫が一面に敷かれていた。奥壁は二個の巨石を立てて使用し、



第19図 北垣古墳群第一次調査全景



第20図 北垣古墳群第二次調査全景

その上部のすき間を110センチ前後の礫で埋めてある。側壁は左右とも床面からの高さ〇・六～〇・八メートルの巨石を並べて腰石として、その上部に110～80センチの角礫を内側に持ち送りながら積み上げてある。天井は奥壁側を幅110センチの巨石でふくらむ、入り口側は幅四五センチのやや小形の石を載せてある。玄室の高さは1・111メートルである。前室との境の玄門は幅〇・六メートル、高さ一・〇メートルで、床面には框石を敷く。框石は右側が完全に一枚石の立石で、左側が立石と天井石との間に厚さ110センチの礫を挟む。天井の框石

第1表 北垣古墳群古墳一覧表

(単位: メートル)

遺構 番号	墳丘 玄室 遺物	長径 長さ	短径 幅	高さ 高さ	周溝 玄門	有無 幅	深さ 高さ	径 前室	幅 長さ	石室 幅	高さ 高さ	構造	時期	長さ 備考	方位		
1号墳	墳丘 玄室 遺物	(8.6)	8.1	0.5	周溝 玄門	有 幅	0.6～1.8 0.60	0.6 0.82	10.5 前室	0.73 0.84	石室 横穴式	(7.06) 1.11	6世紀第Ⅱ四半期 備考	N-31°-W			
2号墳	墳丘 玄室 遺物	12.7	12.2	3.2	周溝 玄門	有 0.62	0.8～2.4 1.01	0.3 前室	石室 横穴式	(6.05) 1.67	6世紀第Ⅲ四半期 備考	N-43°-W 10体以上埋葬					
3号墳	墳丘 玄室 遺物	2.44	1.95	2.23	周溝 玄門	不明 —	0.62 —	前室 —	石室 横穴式	(6.30) 1.26	6世紀第Ⅱ～Ⅲ期 備考	S-32°-E 4体以上埋葬					
4号墳	墳丘 玄室 遺物	1.91	0.70	(0.77)	周溝 玄門	不明 —	0.62 —	前室 —	石室 複室横穴式	(6.30) 1.26	6世紀第Ⅱ～Ⅲ期 備考	S-32°-E 4体以上埋葬					

遺構 番号	墳丘 遺物	長径 玄室 長さ	短径 幅	高さ 高さ	周溝 玄門	有無 幅	幅 高さ	深さ 前室	径 長さ	石室 幅	高さ 高さ	構造	長さ 時期	方位
5号墳	墳丘 遺物	11.6 玄室	[10.0]	1.9	周溝 玄門	有 0.79	1.9~2.7 1.00	0.6	15.9	石室	複室横穴式	7.09	N-36°-W	
6号墳	墳丘 遺物	2.40 玄室	1.96	2.16	玄門	0.79	—	前室	0.75	1.13	1.08	時期	6世紀第Ⅲ四半期	
7号墳	墳丘 遺物	12.4 不明	0.7	周溝 無?	無?	—	—	—	—	石室	複室横穴式	(3.86)	N-30°-W	
8号墳	墳丘 遺物	2.30 玄室	1.95	(1.22)	玄門	0.58	(0.77)	前室	0.81	不明	(0.63)	時期	6世紀第Ⅱ~Ⅲ期	
9号墳	墳丘 遺物	不 ^レ 明 不明	不 ^レ 明	周溝 無?	無?	—	—	—	—	石室	竪穴系横口式	4体以上埋葬	不明	
	玄室	2.07	1.03	(0.70)	玄門	—	—	前室	—	—	—	時期	5世紀第IV四半期	
	須恵器(甕1)、剣1、錐5、馬具1、編子1、刀子1	(11.0)	(10.6)	(1.1)	周溝 不明	不明	不明	石室	複室横穴式	8.33	N-43°-W			
	墳丘 遺物	2.12	2.14	(1.56)	玄門	0.60	0.82	前室	0.72	1.07	(1.04)	時期	6世紀第II~III期	
	須恵器(杯身1・杯蓋5・高杯10・同蓋3・提縫5・平瓶1・直口壺1・壺4)、土師器(杯1)、甕3、編織1、滑石小玉1	(9.1)	不 ^レ 明	(0.7)	周溝 有	1.0~1.6	0.2	不明	石室	複室横穴式	(5.50)	N-47°-W		
	玄室 遺物	1.88	1.91	(1.17)	玄門	0.92	(0.88)	前室	0.64	1.58	(0.89)	時期	6世紀第IV四半期	

(単位: メートル)

は幅一〇五メートル、厚丸約五〇センチメートルの巨石である。前室は長さ一〇・八五メートル、幅一・六七メートル、高さ一・四七メートルで、床面は玄室同様の敷石を施す。前室と墓道との間にむ、床面に板状の框石、両側壁には立石の神石、天井部に楣石がみられる。また、この部分には石室を閉塞する石積みが残存してゐた。墓道は玄室側一・一メートルの壁には角礫が積まれてゐるが、床面の敷石はない。墓道の幅は玄室側一〇・七六メートル、入口部や一・〇六メートルである。石室の主軸の方位は、N-43°-Wである。

石室内は奥壁最上部に小さな盗掘口があるが、床面はほとんど盗掘を受けておらず、副葬品はほぼ完全に

残っていた。玄室および前室から出土した主な遺物は、須恵器の杯身七点・杯蓋八点・提瓶三点、直口壺一セツトと、大刀一本・刀子四本・鎌三五本・馬具三点などの鉄製品、銅に金箔を張っていたと推定される耳環三個・碧玉製管玉一個・四〇個以上のガラス製小玉などの装身具である。

また、人骨が頭を両側壁に向けて主軸に直交するよう並べた状態で、頭骨・四肢骨・脊椎・骨盤などが検出され、その数は合計一〇体分以上にのぼる。2号墳の築造時期は、石室の特徴やこれらの出土遺物からみて、六世紀の第三四半期と考えられる。

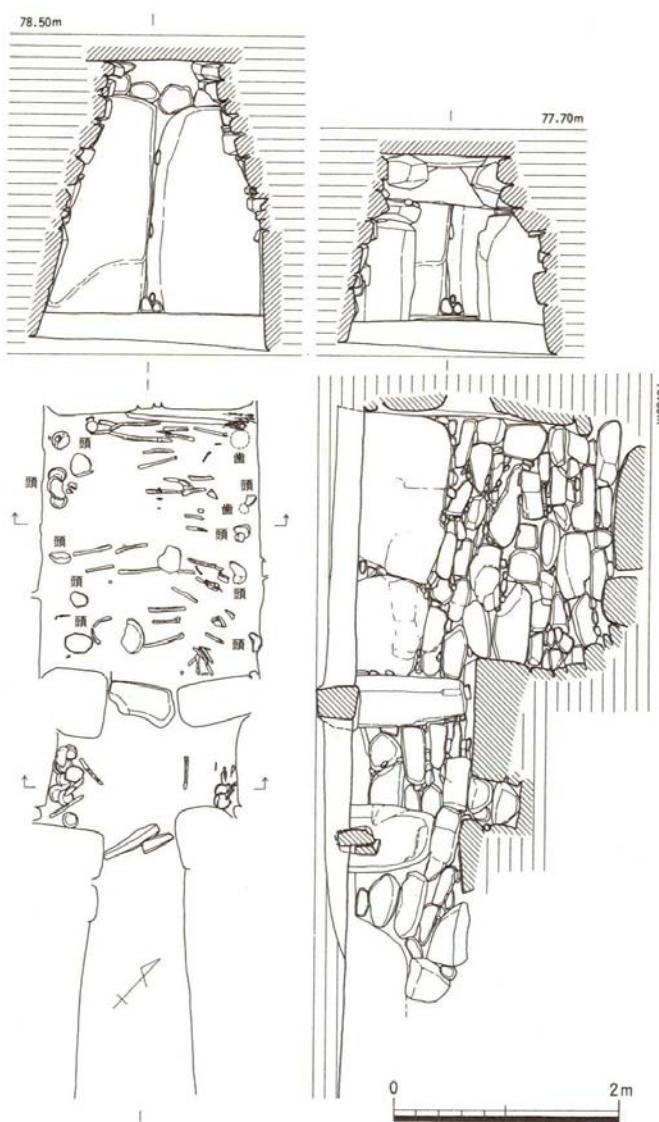
古墳以外の埋葬施設では、小石室が四基検出された（第2表）。

1号小石室（第23図）は、当古墳群の中央付近に位置し、標高は八三メートル前後である。石室の墓壙は、平面形が長さ一・九メートル、幅二・〇メートルのほぼ正方形をなし、深さ〇・四メートルまで残存した。石室は玄室に墓道



第21図 北垣古墳群 2号墳

がつく、単室の横穴式石室の形態をなす。玄室は長さ〇・八六メル、幅〇・九六メルで、床面には円礫が全面に敷き詰められていた。玄門部は幅〇・三三メルで、床面に框石が置かれ、両側に袖石が立てられていた。墓道奥には閉塞の石積みが残つており、墓道は入り口に向かって八の字形に開く。石室の規模からみて、当



第22図 北垣古墳群 2号墳石室実測図

第2表 北垣古墳群小石室一覧表

(単位: メートル)

遺構番号	墓壙	幅	長さ	深さ	石室	構造	方位	長さ	時期	遺物
1号	石室	長さ 1.9	幅 2.0	深さ (0.4)	玄門	幅 0.32	高さ (0.35)	墓道	N-43°-W	時期 六世紀第Ⅲ
小石室	墓壙	石室 0.86	高さ (0.52)	玄門	0.32	墓道	0.94	遺物	鏡 鏡面身・柄蓋	
2号	墓壙	(2.6)	1.2	(0.7)	石室	石棺系石室		N-58°-E	時期	
小石室	石室	1.78	0.42	0.29	玄門	—	—	墓道	—	遺物 須恵器高柄1・蓋1
3号	墓壙	2.8	1.3	(0.6)	石室	石棺系石室	N-46°-E	墓道	—	時期 刀子3・ガラス玉1
小石室	石室	1.86	0.47	0.38	玄門	—	—	墓道	—	遺物
4号	墓壙	不明	不明	(0.8)	石室	石棺系石室	N-83°-W	墓道	—	時期
小石室	石室	1.72	0.42	0.45	玄門	—	—	墓道	—	遺物

小石室は小児用である。

副葬品としては、玄室入り口の右側壁付近から須恵器の杯身と蓋がセットで出土し、内部にはハマグリが一個納められた。時期は六世紀の第三四半期である。

遺跡の性格

節丸地区には祓川を挟んで東西の丘陵部に、六世紀代を中心としてその前後の時期にまたがる

群集墳が多数分布しているが、北垣古墳群の発掘調査によつて幾つかの具体像が明らかになつてゐた。つまり、古墳群全体の築造時期と位置関係については、まず五世紀代後半に竪穴系横口式石室を主体部に持つ3号墳・7号墳が約七〇メートルの距離を



第23図 北垣古墳群1号小石室

おいて築造される。その後六世紀中ごろに、内部主体に未発達の複室横穴式石室を持つ1号墳・4号墳・6号墳・8号墳が一五・三五メートルの距離をおいて相次いで造られる。六世紀後半代に入ると、完全な前室を持つ複室横穴式石室を主体部とし、それ以前に築造された古墳の空白地を埋めるように2号墳・5号墳・9号墳が築造される。その後七世紀初頭まで、これらの古墳への追葬が盛んに行われたようである。2号墳では、玄室に一〇人以上が次々に、しかも整然と追葬されており、初期に埋葬された人骨は前室に移動されていることが判明した。また、副葬品をみると、農工具に比べ、大刀・鉄鎌に代表される武器が多い点に特徴がある。

石室構築に伴う共通の特徴としては、丘陵上部の平坦面が少ないという地形に起因するのか、墓壙が一・五・二・〇メートルと非常に深く、石室の大部が旧地表面下に築かれていて、天井付近の一部だけが地表面上に顔を出すというものである。また、石室は各時期ごとの変化の様子がたどれるが、周辺地域では六世紀初頭にみられる单室の横穴式石室が、当古墳群では存在しないことに疑問が残る。ただし、1号墳は複室横穴式石室としては非常に古い様相を示す。墓道については、すべて南東部の斜面側を向いている点が共通している。

石室構築に使用した石材は、花崗岩の角礫が多く、小形の円礫については河原石が使用されている。河原石は東側二五〇メートルを走る祓川から運搬されたと考えられる。花崗岩は当丘陵周辺に巨岩が露頭しており、9号墳の西側と2号墳の南側に切り出した露頭があり、9号墳西側の露頭の北端には数個の石材が集積されていた。ただし、これらの遺構からは出土遺物がなく、明確な時期は不明である。

五 川ノ上古墳群

徳永川ノ上遺跡は、旧石器時代から中世に及ぶ複合遺跡であり、墓地も弥生時代後期から古墳時代初頭の時期と、古墳時代中期から終末期の時期が確認されている。なお、古墳時代後期から終末期の集落は、約二〇〇メートル東方の源左工門屋敷遺跡で、六世紀後半から七世紀初頭の堅穴住居跡一一軒が調査されている。

古墳時代中期から終末期にかけての古墳群は当遺跡の中央部から南部に位置する。遺構は方墳四基と円墳一八基、小石室四基が検出されている。

四基の方墳のうち3号墳は一辺が一二メートルで、主体部は破壊されていたが、周溝から仿製鏡一面、勾玉四点・小玉約四五〇点、豎櫛六点のほかに鉄製鋤先・刀子などが出土しており、五世紀初頭と考えられている。一八基の円墳は、河原石積みの横穴式石室であるが、後世の開墾でほとんど破壊され、石室は腰石部のみを残すものが多数である。しかし、床面から出土した遺物は豊富で、須恵器・土師器のほかに、鉄刀・鉄鎌、馬具、鉈、金環・銀環、勾玉・切子玉・丸玉・小玉などがある。これらの円墳の内部主体は祓川の河原石で構築した横穴式石室で、石室の形態は正方形、略正方形、縦長方形、T字形の四タイプがあり、羨道の形態も両袖、片袖、無袖の三タイプがある。造墓活動は六世紀後半から八世紀前半にかけてである。

六 鋤先遺跡